

特別講演 1

「NVAF 患者における適切な抗凝固療法

—Data From Japan・リバーロキサバンへの期待—

九州医療センター 脳血管・神経内科 科長

矢坂 正弘 先生

腎機能低下は心房細動患者の複合リスクを高める上、DOAC 減量の一因ともなる。加齢や病態により腎機能は徐々に低下し、いずれ抗凝固療法に大きな影響を与える。こうした中、腎機能低下例においてもリバーロキサバンの安全性と有効性を示すデータが蓄積されつつある。同薬は腎転帰を悪化させないとの報告もあり、これらの新たなデータが、腎機能が低下した心房細動患者の抗凝固療法をどう変えるかについて考察したい。

さらに、脳梗塞の既往を有する心房細動患者では脳梗塞再発と頭蓋内出血発症の両リスクが極めて高いため、抗凝固療法には十分な注意が必要である。本邦において、NVAF に伴う脳梗塞急性期 1,300 例以上を登録して行われた、RELAXED study の研究結果を交えながら、国内の実臨床下において集積されつつある、二次予防データを振り返り、脳梗塞急性期から慢性期における治療ストラテジーを考える。